

最近、3つの究極のスピーカに出くわした。一つは寺垣スピーカというもので、オーディオマニアの人ならご存知と思うが、従来のようにコーン紙を使ったものではなく、通常のスピーカとは全く違ったモノである。ある「舞」の公演で使用していたので、終演後に開発者の寺垣武さんに説明していただき、くまなく見せてもらったが、従来の方式しか知らない私に原理を理解するのは無理だった。しかし、録音した音楽ソースを真空管アンプで鳴らしていたのだが、自然で生の音に聞こえていた。

次は8個のスピーカを円形に並べた金属製の完全密閉型で、ラッピングスピーカと呼ぶが、生々しい音でさまざまな分野で評判になっている。本協会会員の野澤順一さんが開発したもので、ここまで来るには試行錯誤の連続であったこととお察しする。理論など語らずに、この音をまず聞かせてみると「この音は凄い！」と驚くという。室内音響特性による干渉が少ないのも特徴。そしてもう一つは、やはり本協会会員の石塚進さんが開発したエルシースピーカというもので、「いままで騒いでいた幼稚園児が、このスピーカの音に反応して踊りだす」ことから、脳を覚醒させ

元気の出る嘶

る効果があるのではといわれている。石塚さんは、これまでのスピーカに不満を抱き、ひずみやすいエッジの部分に使う材料を研究して、手抜きをせずに昔の文献を頼りに丁寧に作ったところ、この音が出たという。お三方とも、私たちが忘れていた「モノづくりニッポンの職人技」で生まれたスピーカである。プロの音響家の耳でなく、演奏家や観客、つまり音に先入観の無い方々の評判がよい。こうなると、音の専門家と、非専門家の求めている音に差があるのでは

ないかと思う。私たちは30年来、流行のスピーカを手に入れば仕事が舞込んだのだから、エンジニアはあまり観客の求めている音に

ついて研究してこなかった。いろいろといじくり回して、いつもの音にしてしまっていたのではないか。昨今のミュージシャンがめざす音は、心地よさであって爆音ではない。いま、その要求にしっかりと対応できるエンジニアが求められている。あまり専門家ぶらないで、これまでと違った観点から、良い音を追求してみたいかがでしょう。

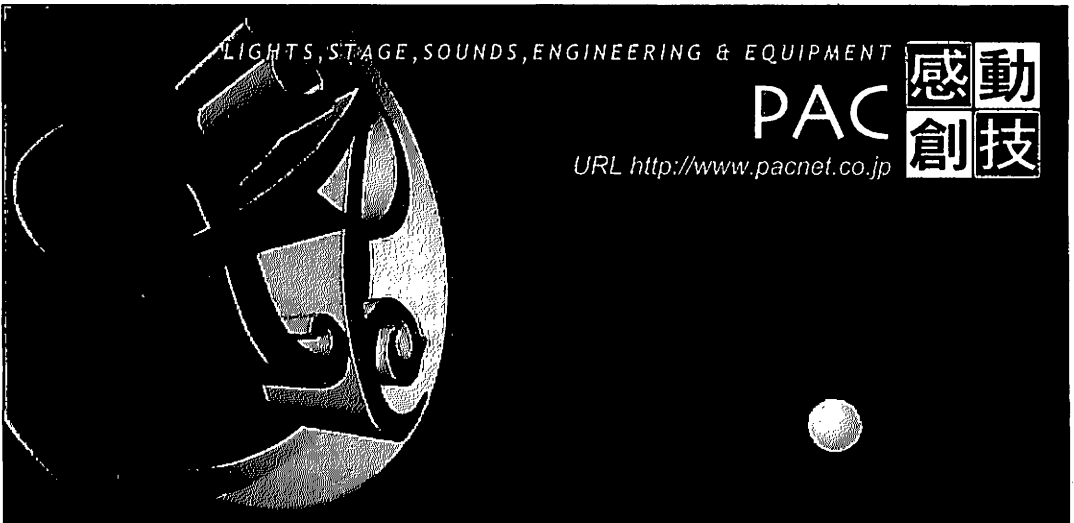
【八板賢二郎/ザ・ゴールドエンジン】

LIGHTS, STAGE, SOUNDS, ENGINEERING & EQUIPMENT

PAC

感動 創技

URL <http://www.pacnet.co.jp>



株式会社 パシフィック アート センター

本社 三郷機材センター

〒104-6041 東京都中央区新富2-8-1 金錦ビル TEL 03-3552-5687 FAX 03-3552-3177

〒341-0018 埼玉県三郷市早稲田5-11-3 TEL 048-957-8500 FAX 048-950-7757